

6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3

覺

皇運降興竟々萬國々阜絕被為盡云而主意存往國
主本於為之折極全不苟一方ニ重仕ツ蒙之事業及遷延
不相歟勿悔ニ尊共自然歸遠ニ地舊東ニ流弊中內
相除日施苦處故生有之今般嚴、謹政ヲ改革シ感激奮勵
可改汝子又其意ヲ體得シ一工滿同力殿徃ヲ不論身事
是可也各其職掌以身更勵大務之修急事

六月十日

文部省知舊事

口座

知事公節布教事為行如く先帝御政不振於今宣教
之始後之源也附向く如島民計為利小余畢竟如不無以
不揚于任之實事不既已爰慚愧至之因テ今般嚴

早稲田大学図書館
文書27
D 20



而政制存詣局各其職掌盡力勿論其職務中於聯舊事之
健習节度心身次第方速中出而政事筆尚而外主廣古嚴之不遺
忠告建言の方其淺論事理的高焉為真亦株揮の方し
以身率也

六月十一日

大參事

先般李細申諭スから西蕃改政改筆行矣才等效代
我祖宗以來矣葉々勤績或ハ其身多年之功力者
之處ヨリ毫當ノ無故減祿申付集矣心而不忍ニテ
其上覆滿貴人際濟等活計之過於テモ不窮力復其
事事申付凜改憲寧ニヤ心中不懶鬱悶之降兵方今
天下一般之形勢有本藩之傷不斷之空也

天朝勿論既治績相立諸藩對し我知事ニ感

務難相立段妄比上聖厚之至心付汝等能ニカ胸申シ
苦辛可致洞察り也久然及減祿近ニ汝等妻子とあ
至凍餒食無了条ハ而此之令僅獲也る各諫諱
テアノ教誨ヲ相守速て天朝遠大ハ而若趣改為奉
我舊治ニ實効相善移上下一和協力方より度歸
云無穀也莫外即省飢ヲ不出禪而已心中ノモ不因夢
往々之淺論古相醸り得ニハ我知事ニ付活スアリテス
遂ニ義感及御表シが年々ノ因ニ今更ニヤ誠衷
社寔相所育廢歲ノハ汝等又誠意足矣請ノ體れを事
ヲ敢テ以岩

六月十一日

岩

知事

瑞祥院掠以津種恢復モコテヨリ時代ヒトツと徳テ予ノ世ヒトツ
至迄割據封建ヒヨク形勢ヒヨク我ち地人民ヒトツ如シ君臣ヒトツ之義ヒトツ
以テ相援ヒヤウ其邊ヒヨク其相應ヒヤウ而度ヒヤウ立食ヒヤウ其鈞合ヒヤウ
以テ備ヒヤウ置外海ヒヨク受ヒヤウ一藩ヒヤウ藏掌ヒヤウ之御事ヒヤウ姿ヒヤウカ
某方ヒヤウ今ヒヤウ皇政ヒヤウ復ヒヤウ也ヒヤウ盛ヒヤウ時ヒヤウ當ヒヤウ德川氏二百餘年ヒヤウ
某也ヒヤウ勢ヒヤウ是ヒヤウ日ヒヤウ德ヒヤウ日本中ヒヤウ畫ヒヤウ天朝ヒヤウ地人民ヒトツ私ヒヤウ有ヒヤウ年
通理ヒヤウ無ヒヤウ名義ヒヤウ辨ヒヤウヘタルヨリ諸藩ヒヤウ小ヒヤウ役籍奉ヒヤウ國校ヒヤウハ
天朝ヒヤウ別ヒヤウ地ヒヤウ治ヒヤウ知事ヒヤウ人ヒヤウ下ヒヤウ給ヒヤウ共免ヒヤウ申ヒヤウ次ヒヤウキ
モ無ヒヤウ益ヒヤウ亦ヒヤウ不ヒヤウ似ヒヤウ繁ヒヤウ十分ヒヤウ家祿ヒヤウ賜ヒヤウ多ヒヤウ滿ヒヤウ之
知事職ヒヤウ你ヒヤウ付ヒヤウ田ヒヤウ未ヒヤウ君ヒヤウ意ヒヤウ義ヒヤウ儘ヒヤウ頭ヒヤウ支配ヒヤウ
ナシヒヤウ旧ヒヤウ來ヒヤウ親ヒヤウ昵ヒヤウ以テ福ヒヤウ之指揮ヒヤウモ行ヒヤウ扁ヒヤウ上ヒヤウ下ヒヤウ協ヒヤウ和ヒヤウ之
少ヒヤウ敵ヒヤウ慮ヒヤウ誠ヒヤウ難ヒヤウ方ヒヤウ事ヒヤウ無ヒヤウ有ヒヤウ戶ヒヤウ元ヒヤウ此國ヒヤウ

主ヒタチニシモ今ハヒヤウ天朝ヒヤウ官人ヒヤウ前ヒヤウ朱ヒヤウ申ヒヤウ我疆ヒヤウ内ヒヤウ相應ヒヤウ
制度ヒヤウ甲ヒヤウ海ヒヤウ之府ヒヤウ舊縣ヒヤウ一體ヒヤウ天朝ヒヤウ少ヒヤウ規則ヒヤウ庚ヒヤウ之
知事ヒヤウ職掌ヒヤウ失ヒヤウ次ヒヤウ才ヒヤウナリ

天朝ヒヤウ而ヒヤウ旨ヒヤウ此國ヒヤウ人民ヒヤウ知覺ヒヤウ開ヒヤウ禹國ヒヤウ阜巍ヒヤウ
シタハヒヤウ邦ヒヤウトキシトノ至公至仁遠大ヒヤウ
敵ヒヤウ慮ヒヤウ終ヒヤウ一无ヒヤウ其所ヒヤウ不得ヒヤウ也ヒヤウナリ各生活ヒヤウ道ヒヤウ
得ヒヤウ各其生ヒヤウ所ヒヤウ達ヒヤウサシントヒヤウ御ヒヤウ旨ヒヤウ也ヒヤウ染ヒヤウ習ヒヤウ俗ヒヤウ
慣ヒヤウ仍ヒヤウ舊ヒヤウ才能ヒヤウナシヒヤウ祖先ヒヤウ仰ヒヤウ勞ヒヤウナドヒヤウ申唱ヒヤウ後ヒヤウ世ヒヤウ彌ヒヤウ
奉ヒヤウ狼ヒヤウ天ヒヤウ對ヒヤウ愧ヒヤウ且ヒヤウ怖ヒヤウハキ事ヒヤウナラスヒヤウ新ヒヤウハ坎ヒヤウ
一勅ヒヤウ世ヒヤウ生ヒヤウ逢ヒヤウタルモノヒヤウ各已ヒヤウ分ヒヤウ觀ヒヤウ誠心ヒヤウ苦惱掌ヒヤウ
ラ畫ヒヤウ時用ヒヤウ供ヒヤウセント思時ヒヤウ更ヒヤウ難ヒヤウ矣ヒヤウトスヒヤウキ事ヒヤウモナ
且ヒヤウ又ヒヤウ各天分ヒヤウ知覺ヒヤウ番軍ヒヤウ無ヒヤウ御ヒヤウ才力ヒヤウ養ヒヤウ之

農民ヲリ太參事ミミ 天朝ノ官人とも成昇スヘシハ實面卑
張合ニアニ而志態ニ生レ過タルト云ヘシサレハ。天朝ハ才能絶
濟多才ナト矣、人才而豈庸有之。皇國十分ノ富庶トテ
為威竟、外國ヲ制歟。宇内之寇絕アソノ 邦タラントノ御主
憲ニシテ邊今古國ミシテ 形勢ヲ察スルニ莫佛魯水、ヤキヨ強リ
月ニ大ニテ不恐。今ヨリ 白玉園 ミシハ 沢也凌、源也受ケ大害ヲ主
コト根前可古ニコト放存セ依ニ深ナ。徽慮也古為在
御政體ヲ為ニシテ得有我等モ其旨趣ミツ 尊奉、夙夜ナ
盡者也ハ即日、勤王也カノ目的、立タル六在職者ハ
勿論其他ニ士庶、至近人、諱譏モ 他、嫌疑モ 頷ス雖凡モ
後此ノセラ以、而有諭モ 奉行スルニ職事ムカシ 兵事
死スルトモ主事ムカシ 死亡共ヤハ無ク利ウツク有ハ
勅達ミツダク 乞不朽之名青史ミツシヒ 載セラルトノ御布告モアルセハ

我ホ初各モ断然ト疑慮ナソ奉スヘキ也如斯
廢帝ニ辨ナタ恒ノ姦モ 痘モ 營モ 勸モ 励モ 自分因竊
ヲ招キテ難成モ 命ヘ度モ 御旨趣モ 殺モ 御政體
モヨリカハ即キ今日ノ逆賊モラスヤ 去レハ其上旨趣モ
奉行スル者我等ニキ之ヲ守リ務ルハ各ノ職分ナリ
次キハ府縣モ自一事モ 共蕃於モ ハ一際尊奉セス
テナハサル誤アリテリ其子細モ 府縣ハ 天朝モウミン 人物
之體モ 特度モ 直モ 品モ 知事モ 重職モ 捨モ
敵應モ 有モ 者モ 声モ 任モ 知事モ 重職モ 捨モ
之モ 免モ 收モ 民モ 君モ 知事モ 知事モ 之モ 又若
ヨリ亘モ 日今ノ支配モ 未モ 七モ 情通達モ 未モ 謂處

ち天朝ニシテ能越モ早々貫徹スル事ノ府縣等
ルの道行あるずすや物も之を反す士民ハ其知事ニ命焉
達セキト知事ハ有テモ無キ如リナハ 天朝ニシテ人ニ一見
其智事ナラ事ニ許サル人也然ニ於テ我主不才ニ義教
天朝ニシテ方針モ人道有り方ノ限ニ力ノ限ニ命ニ節ニ
倉勉テ度威ハ在處セヨシ陰羽七州の規範も成ニ權
實知事ニシテ人トニテ知事ニシテ職掌ニシテ
四秉・直心義義ニ益重くして瑞祥院様ニ功業歴代
之尊意ニ叶ニ所ニ一望ラバ性秉ニ習伝之具、或ニ後宗
ノ安人、或ニ我儘ニ於長・知事ニ命ニ利ム如クモジ
我主ニ東ニ充セラレテ別、官人ニシテ皆ニ知事多キ時其籍
置カ佑、應セタるニテ、旌揚ニ及ビ 天朝、抗元ハ
即逆賊ナハ忍天罰、あ大らヒシモ長州の激往ル

段監ト吉庵トナリニ斯期ニ至テ修伏、或ニ腰肩
タルトテ元所謂狗距ニシテ我祖宗ニ神靈ニシテ地下
ナシト仕修ニ事ナリノヤナレモ誠ニ心ナシアリ也
空氣ヲ走リ始終考収束ニ息義義ニ絕するトヨ我
知事ニ職掌ニシテ凡凡而往來せ第モ丁寧
互徧ニ告諭、及モ也

午六月廿六

答謝

天地開布て其間、人食生セヨナリ各天職セサセ
武ニ農トミ工商もナシシテ之ヲ務メ司ル者零
時、我意ナシ傳くとのあリテ他ニ病ナ其職業ヲ遂
事能ハナル故其力又能ニ勝レタ者ヨリ月俸モ別
三裁判ナセん事ニ民ナシ候ナシモ天子則ナ

六十餘人ヲ撰ミ舉ニテ六十金川、今ナ皆主と官吏と有
名ニ當るものと仰きるが其下じ多くの職役ヲ置キ其中
治りきちる五年の仕志ト仕滿メリモ再ヒ原の農、
惣リシ也又内外の御事備ニ備人馬兵卒と民の強健
者多ク撰ミ宣ニ其年期昌メリモ又農ノ内
都へ士農ノ術環九通ニ於のち叶ニ郡縣の
姿ト申ムヨリ中世、皇國・強解セヒ奉事ノ源叔朝
日本總追補役の事ト許シ易リテ我部將之ニテ
府めニ守護職トテ天朝の内地人民を執事と
其士卒ヲ守護職トテ天朝の内地人民を執事と
シテ其子孫トテ譲ルニモトアリテ子孫或ヘ幼
弱ナク父祖シ業ヲ傳ヒナラキル者多ホ又副

農ヲ強社ノ省と撰ミ舉ニ共ト古事記年と書ヒ
再農ヲ陽事ナキシトテ次第ニ立城ノ情の無事
の文書蓋テ兵と農とニ分ニ封建、公安ニモセテ
方今、自政復古ノ時ニ際、元々地人民ハ私有ヌ物を
主トスル通理と辨ヘテ諸侯と共て殿藉有義
改セリ上ニ更ニ吉郡縣ノ制ヲ復すをより更ニテ治セ
サムヨリとノ事ナキシテ次年ヨリと改る處處野賦
義減ニモセテ行方ノ全くぬ百世封建ノ情也又
谷筋ノ石亘の義減ヒ先固確、情ありてを察キテ
其廣野著シ知事トテ其之地ト主ニ掌也ト
徳東シ平民ノ事ナキシテ其事以テの職ノ御ノ御也
知事二十六、一ノ家給トテ年事以テの職ノ御也
禄と減候トテ年リ、もれれもかく御ノ御也
之無義、既ニ主セラリケン、始乃修モ御ノ御也

郡縣の内制役より金をとふ取て有國者に
色付かれて一日一朝延びず士族の農事も即ち本業を
みよあると主めえん農すり方正農とゆふる
する如多士族の多寡は惑せば外を
なうされど士族甚祖先戰ひぢる事あれば
黒代の勤務或は每年其力の勤務ありもめり且
は士族の事務と譲るテ三民とも世襲を陞遷の度
傳承と夫婦と傳承と傳承辰年半多華燈乳
しは今此士族の力と三民の私婦をもととあらず
治室服を知る處あらまゆうく恩徳ちう
士族の傳承と夫婦と傳承と傳承と傳承と傳承
予難事しめられたる實心思ひほむかづくの治室

於モ其急を傍睨して其息ヲ報せらる程ありしき
於是予夙夜再三四吉族の爲を慮る處甚
うちより先角其事と相和て猶化て力無き才士
竟を油革の用意と削そて寔了
始し力と云ひやうりと不謀出る
ちくさとさりと油革许多の用意と
占めし事とし第に其想を口に主として
用翼一歩の事と之の全體と少しして
買入たるのなほて一旦是と川柳
とぞと主と能くと思ひあらま

平家家祖はすこことさう士族の
世襲へ屬く御様へたよア候
乃門もすく事と深く思ひ候までは
時給の止しましておやつの桂根寺
ア桟木をもん年間も沙事
ヨリ沙中も甚也と身も體もなし
唐津の源氏領内をもろに治て士族
のあ姓アキト傳五と號へたりる名を以て

沙家祖と是を承りし事と傳て
後承はれずかずのもの也日高にて
ナ所守候と持もりシのトト叶ふ
強一年とて候とリ精より
お定便と信ひ候と申すが如き
目と毒の聲と候許多の令とあと
力の及ぶる所と申すが如き

死體一十五具食之也於可食之處八
事也而云二切。といひて其處に未病し
農の在處と在地して保養扶助して
者をもとめん。一王孫少子傳と貽し
御教授と與一人やエ教育してモ
テ被官と稱せむ。其處の田畠より
あすこちか冬季。一概に大脣に

至る。油茶粉にて。年滿七十以上
全濟せん事。と傳へ。蓋乎此也。

十月丁

謹而奉懇所臣

此一月。接種。但仰頭。通引之。大抵
法系沙連。而中一民附屬之。是也。然
此亦至。近候。日上。前。所。不。克。至。四。年。

高車國多那山背峯山是行遠處
詔書後有其向臣人古車多南行
慎軍之多使行於上多稱之曰行
上多山崎所居多是行遠處多沙
以疾至其向役人上多走之兩事多
之和多生方上多走之多高多走之
以事多取之多事多行之多行多

其向多山背峯山是行遠處
多信者上多走之多行之多走之
其向多山背峯山是行遠處多走之
多行多走之多行之多走之多走之
其向多山背峯山是行遠處多走之
多行多走之多行之多走之多走之
其向多山背峯山是行遠處多走之
多行多走之多行之多走之多走之

虎口兩人亡。其生之日。曾假設而夢喪風
雲。疑亦卒。先國民。用深閑。望佑虎
也。

天無所。謂禮也。月有盈。而有
愁眉也。元狩者。年號也。三十一年也。
南歸。之役人共。其故。之喪也。民幼。憂高
人望。士高。之。不。向。也。多。也。也。也。

隱。以。堅。也。種。之。所。以。陳。不。以。處。耳。
批。惟。之。然。承。也。有。為。之。而。之。以。在。
不。如。若。是。以。之。人。之。身。上。之。禍。也。
之。之。固。不。至。而。之。而。復。之。期。
之。之。之。晦。以。唐。清。之。少。方。心。降。之。
也。也。也。也。情。全。東。東。也。馬。也。因。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。

出玉堂之日未嘗不仰天而歎
予生之家和一亦可通於人畫
士領之其好鄉邦者尤遠
技筆——既以然也也

△
自是之始以是因沿卿之肩爲序而傳
於國之校序之察傳之企國之留事卿之後
而後焉之序之初 王之之初教國大德
及君私也亦宗也萬及臣故之子極而曰書
而揭之則之初 王之之初國之之書
而生之大教書之而之今以國書之王居之
傳之而之威之則之為
夫躬一中沐之而上其事焉而附序之士

おおきに上りまし。まことに、彼の氣の如き
相思勿放し。従ふとおれは全く、毒氣に感せ
利口好傳言者也。一言も國難を口革
捨てぬ奸邪小吏、國の害也。」
王氏が唱へる『君側』の事理は、
要諦の如く、不擇國私へ役立て自業
の意を含む。王氏は、要諦を以て其勢
を制す所から、更に「狡智奸傳言者等の流連

悔悟化善心。而して、亦無事の如く、廉
概の如く、萬物を存する極度を傳承。且
後太宰の推舉を蒙る。是の後、人知
撰著多作。三書の如く、而して、名流達の
人物を前に、あれど、彼の才は獨創の一門。而
津江年命が、必ず才をうらやむ。國家を
主導する全般の三事の如きを抱き、自己に以て
廣く入れ、古は御方様又は、多能也。

之慙愧也。也成以是日向。肝臣
也得肝歌聲風流。嘗有其事。
右與赤石室也。遂今之甚矣。而
部也。也。多。至國。因。率。界。東。更
處。也。中。一。年。相。連。可。想。到。汝。
然。之。即。可。到。所。人。也。如。彼。者。
之。如。物。也。於。萬。風。也。即。那。聲。微。別。
而。在。人。今。事。得。也。人。地。那。那。希。全。以。那。

國事也爲我所
和乃正也使君
不以濟也故也
天朝也當可也
大朝也國也年
拋妻也難也悲
猶之也

少府二庚年四月

清江集

有志共

非遇無復

皇朝甲子

